



柳園詠子

二

特別
イ 4
3163
41(2)



貴
14
3163
41(2)



天

たやうぬくかまやたりれ久方おちよまれんおちしらぬ
思ふそら登の川系まきとれくまれよこまらひるりまれ

日

天は思ふまゝに世の中人の心もく積くもねる年

月

久方お月の妻も氷ならしくか我もよまらそをゆりたれ

里

人のおおむのちまらるるお思ふのむらぶはの世より人

風

世よりおぬまの信風もたれあはるる船いづるもく久方

嵐

岩の根の朽葉を香しき花もきて志も枯らむ
雨

うららかに暮の光をさす
暁

むさしわ梅枝を暁しよ
朝

朝あけのけやむ
夕

とて川神世のぬき
暁遠情

朝月夜に野のむけの
薄暮松風

雲のまに入目のね
竹風如雨

軒らに竹影を杖枕
山

大原やをむね山の松葉も
雲の松ゆき

をねのまき
山雲

西ふくはさの山
水

く
河水久澄

吉野川を流るる世のうね波をまきまきとやめれば
あつたまきまきのまきまきとやめれば川水もみそを
海邊夕

姫島結松のゆき日は鷹守をわきまきしきり杖尾をまき
崎浪 あつたまきまきのまきまき

嶋のよきまきまきとやめれば何れもくらす浪の白鳥
關鶏

あふ坂の松の下流朝日とやめれば八景の面をまきまき
幽居

くらすくらすくらすくらすくらすくらすくらすくらすくらす
田

たかひて今田とやめれば雑賀野のそとをまきまき
徳波をまき

名所市

人待て三輪の市女とやめれば酒のまきまき
城

千代しつしつ城の高垣とやめれば松も根とやめれば
廢宅

あふ池のむらつ柳橋をまきまきとやめれば松も根とやめれば
清通舎君神秀峯の女藤君のねとやめれば

松の系ねま恒山のうきまきまき杖をまきまき
松の系ねま恒山のうきまきまき杖をまきまき

くらすくらすくらすくらすくらすくらすくらすくらすくらす
白きれあふの山流をまきまきとやめれば世のまきまき

と河のほとりへはふつと草の香を松の葉よりそとてそとて
天津鷹おらうとてふふ山はふもとの田舎をへりてふふとこれ
目海まき尾上の松枝をへりて後よりこれけつとけつとけ
わつたふへへこれ立枝よとてあもさこれのやうにわたりて死
四月をへりて清舎をたふして丹後のつとこれ屋のまゝの
わつたふへへとてふふとてふふとてふふとてふふとて

水清きとてふ種ふおつとて新もとてふとて垣はとてふ可那
水清き島のそとてふとておまふとてふとてふとてふとて
何とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとて
とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとて
ゆとてふとてふとてふとて水ゆの流れつとて胡蝶とてふと

古戦場

駒もつた人々もつた犀川の岸の目もつたとてふとて

晩秋過古戦場

笠置山おほのつれをたててとてふとてふとてふとて
古戦場とてふとてふとてふとてふとてふとてふとて
つとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとて

古城蹟

名もつて磯田の城門もあまふとて流氷解けしむとて浪が
あつたとての大城のあつた鹿火もあつたとて回もあつた
桶と斜もあつた

もつたあつたのりへつとて塚のよとてふとてふとて
里

是やこのはあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

山家

谷川のまじりぬきてゆく水もふんを清くくし色も
たぐ山のいづれの中へはかきこころ木枯れ枯れし

山家水

軒端ゆく山ありぬきてゆく水もふんを清くくし色も

山家橋

はる木をたぐりぬきてゆく水もふんを清くくし色も

山家送年

わさわさ流るる水もふんを清くくし色も
弘化三年正月廿五日難波より舟をこぎて出づる
雪雲をいけて舟の年よりいづれか廿六日堺新道より
はる木をたぐりぬきてゆく水もふんを清くくし色も

道頓堀のやまりて曉ふく朝出て春曉月とて小題を

おして奇なるたるは然代繁りともは涙涌るるはく

堀江川ぬれぬじりぬきゆく水もふんを清くくし色も

於ね一題して

まじりぬきてゆく水もふんを清くくし色も

中村良辰のももそそ異雄

を中やつと流るる水もふんを清くくし色も

石は光澄の七年のまじりぬきてゆく水もふんを清くくし色も

ては月を

舟のまじりぬきてゆく水もふんを清くくし色も

三月朔日伏見の梅を並べ

梅のまじりぬきてゆく水もふんを清くくし色も

初のやまの三條の...
ん

初ら成るにわりの山端にたむけぬ...
二月十三日西田直養が茂川の...
てらまのこれしるは並題花下別人

初...
十四日...
は...
を...

天保九年三月丹陽の...
可も...
樓を...

い...
丹陽...
巻...
哥...
爰...
伊丹...
こ...
生駒...
こ...
中山...
末...

い...
丹陽...
巻...
哥...
爰...
伊丹...
こ...
生駒...
こ...
中山...
末...

うら海ふのもある船鳥よりえわいさい海あるもきいを新たりたり
夏旅

はる多れい晴りもねを大井川に流して遠くまでいりまらん
冬旅

わくくはわいあのかいあまをねりりりりり旅のそらりり那
霽中雨

推の系よりい飯もるもやとらりい山風そつてあやれ東男
霽中閑

鈴鹿川水も八十米もくものを何よりあやい閑海もるも
旅泊

いりりこの浪もていりあつをいりりあいのまよりいりりいれ
天より此舞樂例を二月よりあつあつて九月よりあつ

いりり年々はいりりいりりいりり
うら火のわらもいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

十月朔日箕面山のいりりいりりいりり伊丹の葵園よりいりり
いりりいりりいりりいりり

神五月まのいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり
いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

あついりり道よりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり
いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりり國續風土記撰をいりりいりりいりりいりりいりりいりり
いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり
いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり
いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

のしるる唐はくくはとて大本をこころをさるるを
海音山とてぬ

糸巻糸もいりやいと弁とれいさかこころは嵐次あり
糸巻糸もいりやいと出で松と申て日本より糸巻糸
またのりんとはさかあそとより朝日のくく富士の山
尺ゆと里人心をけいりくくよりてちあるる

小笹系よこもるをさるるをそとて一糸巻糸より日の光尺弁
遠海あそは堂を朝とく立出でて古殿の里寺より
くく自天王の御墓とてい傳へる御墓をあそ
しり里人赤松の族のくくいとそ義王忠義王の御
くくいとそとつ洞もとまらひくくをれとそを折
てまらして

君よまら八重糸巻糸葉今むと一糸巻糸杖もあつはりも
あつ衣くくもいと海にさるるのより野とち土とちくく杖も

秋津河中

杖は川岩根の松はくくいとそもくもく松やとそ人を
立ねくくいと中の中杖は川あくくもいとそをくくいとそ
糸巻糸の出湯のくくいとそも市とてくくいとそ糸巻糸

檣杭

くくいとそ宮柄はくくいと中後て巖となれる檣くくいとそ可
古坐川の虫喰岩一枚岩とて紙尺
巖とてらしり糸巻糸くくいと日数強也糸巻糸花咲山はくくいと
そ間もる杖の目録もむとそ糸巻糸の糸巻糸くくいとそ糸巻糸

ももはの杖は神事やも猪もももはの杖を待てる

馬

若州の美馬の馬はのりも馬もももはの杖を待てる

猫

うら猫もこのまもももはの杖を待てる

犬

大いにとり成すももはの杖を待てる

魚

物もれいももはの杖を待てる

亀

おいらももはの杖を待てる
あつももはの杖を待てる

蛛

目ももはの杖を待てる
はかあももはの杖を待てる
うらももはの杖を待てる
谷ももはの杖を待てる

童の竹ももはの杖を待てる

老ももはの杖を待てる

布袋の月ももはの杖を待てる

ももはの杖を待てる

官女のきももはの杖を待てる

友志を記す

後波よむくしはまのSammus Sannan

やうもい奴

市のあはれさうさうさう玉棒の道はあはれさうさうさう

弁慶の大鐘はけいれ

ひるたふしその時をまう人のほろ力に新ふあはれ

琵琶の法師のあはれさうさうさう

よたの路のあはれさうさうさうさうさうさう

披書知古

うりそえよふさうさうさうさうさうさうさう

吉備大臣

さよのあはれさうさうさうさうさうさうさう

歌

さきさうさうさうさうさうさうさうさう

千載集の中あはれさうさうさう

志の中あはれさうさうさうさうさう

連歌

さうさうさうさうさうさうさうさう

硯

あはれさうさうさうさうさうさうさう

筆

さうさうさうさうさうさうさうさう

墨

あはれさうさうさうさうさうさうさう

もあふねと

うら衣被あしうまきう人のころのしるあきききんくわひ
ひ神のもろこしうけうらまほれたあしうけねくはしうて
志傳し長うまき衣のむらあぬしうやゆしうあきききんくわ
ともしあしうてうら神の衣のむらあぬしうあきききんくわ
かきくもけ世の外の衣のむらあぬしうあきききんくわ

鏡

あしうねのむらあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ
うらあしうのむらあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ

燈

曉をうきてはしうあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ

船

何事あふひのころんねあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ

青黄白

小笛魚をれむらあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ
うらの流れ名むらあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ
一帆ええ二帆はらぬて明あしうのむらあしうのむらあしうのむらあ

夏と冬と

風よらあふひの月あしうのむらあしうのむらあしうのむらあ

柿本大神

鴨山のあしうのむらあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ

大申右大臣のうら

あしうのむらあしうのむらあしうのむらあしうのむらあ

業平中将

をふりて身を浅るゝ嶽のあき申く浦のつらみ入ちと見え
河内女は身頃のほろけふふふふふふふふふふふふふふふふ
文屋康秀

うら織をさすふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
田道

古塚の草花系とやぐれをよめておれ家い跡らけり
楠贈三位

みねと川底のうもれ木得てふふふふふふふふふふふふふふ
常盤所前

右左もろの心も志らるるをふふふふふふふふふふふふふふ
紫式部机よりて月人さふふふふふふふふふふふふふふ

焚くりあひてふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

福祿壽老人一巻の書ものか

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

大海の捨つる子

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

うたあの子

母のあやを小舟にけりうらあの子のあやのあやのあやのあや

達磨

天は日おるもそらひの古壁ふふふふふふふふふふふふふふ

美人

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

農夫

今や遊覧の事も一もやうつゝおぼせてゆく天は鷹の縁

岩崎義隆君のちぬと光平の行より昔おこせん海

いとおとつて此人の映鴉の音もをすしあ

泪を流れてる中夕の泣き一筋此林に暮れぬ影を

幼子をうらむひて七日あつらるる日幸なうと

ていつとせらるる年暮るる夜あつらるる

年月をぬけて一人おぼれぬわちやまのつらさ

又のこのその日か

ゆきこふあまを海城の社とらもとねをあふれてこれた

ねてこのつらさ一日にやとせのあつた社からてれ

あつたつらさねらうおぼれぬつらさあつたつらさ

馬尾風らの病をうとせ

聲ももてをさるあつたつらさあつたつらさ

山田久秋の周忌の冬懐旧

うはつたあつたのちや友をうとせ昔をうとせあつたつらさ

藤垣内翁の朝前會の晩懐旧

窓裏の晴月あつたつらさあつたつらさあつたつらさ

夜懐舊

更あつたつらさあつたつらさあつたつらさ

父翁の十七回忌の夏懐舊とあつたつらさ

夕のつらさ

あつたつらさあつたつらさあつたつらさあつたつらさ

高橋勝房の周忌の菊懐舊

あつたつらさあつたつらさあつたつらさあつたつらさ

本居永平の一周忌の寄附懐舊

あを監りて社を奉る家のいしりあかしの節を今にうつり
祝

君の代の高きあまの御まてこそ中へ民の社をりし
八尺瓊の光をさしよと天地のそらにけしむる浪風をれし
幸遇恭平世

君のついで花をさしよと
はつ人おのふかき持をさしよと
人のあま

何れにわらわのあまの衣か
山内繁樹の七十賀の寄附
三名部の海にけしよと

寄小松祝 年賀

まこととよきてあまのあまの松のふ代をわまし
寄竹祝 同

呉竹のふりよあまても
春祝

庭の梅もむらね松子代
冬祝

風をぬ所代のまやは
器

あまのや鏡の谷れと急は
髪

こころあかくもこころ
髪

車尾村の櫻ハ

延元のみこは所興すと終(西)

漢として伯耆人の奇事あり

天保見のつぎに... 板の實ある... じちやん

永久百首題して一夜百首よめる中、唐人

目のもよみあり... 花子の書り... 書んで... 那

竹垣まのえ服れ返り

やまら末... かつら... 成り... 一... 一... 一...

餅茶とて柳よつる... 國まで... 眉むら... ありて

下欠くじ柳、枝の眉むら... 大それた... 花のま... 那

天保八年... 息人多う... 行く... 花を... 那

むけ

表の形... ち... えん... 花... 花... 花...

人のま... ち... ち... ち... ち...

奇... 奇... 奇...

お松の... ち... ち... ち... ち...

夏

こそ... ち... ち... ち... ち...

花... 花... 花... 花...

沼... 沼... 沼...

うけ... ち... ち... ち... ち...

縣... 縣... 縣...

中

古... 古... 古... 古...

は... は... は... は...

そ先さんものちあけし杖のまきつ然かすれ多くころり如
風ゆめ妹の垣わりの空の毛もあはしてとあやみぬ先香
しすしあさんもの聲すらすて空をさら花はくれはれはるる
みあはく柱女の神く夕月おちつきいづを春とそらんふ
しりあはれ光涼しこ中川を月をさゆし杖もたもさし
山里あきの空垣のむらをあらし志のひ徳もらにけさるり柳
柳葉の香をさし山よりあやそも神代のさへんはるるり
馬州の原荒野とこそあはむしりやまらねてくは愛物より
あきの雲をさしとていふてしりあきの雲のさしとていふ
ふりあはれまらむとて杖のさしあはるる杖の勢はあはく
世の中あはれかやうりよ中は何にかやしは妹の男にて
しりあはれ杖の雲野とあはれむしりあはれし月をさしとていふ

ほろろは矢作の市をさあなり當代いふあはれ杖もあはる
夕なれは倭くもる唐のねりあはれとて杖もあはる
あはれはるる難波のわしり今をせん鴨の羽のひり物言をさる
あはれあはるる百船人あはれとて演名の橋は流さるる母
引も野の木芽るる系合はれ春日くらはれしり一人も
風鈴の音あはれしりさるる中へ

山里のそとをれ美篤吹風の音もあはるる杖もあはるる
小浦廣名の熊野ゆきをあはるる杖もあはるる
あはれさんあはれさんあはれさんあはれさん
水清さ女色の隈のそとをれ美篤吹風の音もあはるる杖もあはるる
とくあはれをさるるしりあはれさんあはれさんあはれさんあはれさん
かあはれさんあはれさんあはれさんあはれさん

わら鷹のよきまは海の中ははてはたのきやあはれは花
清金君湯墨はいてあはれもの一ははる

君のゆく野山のよきまははてはたのきやあはれは花
三月もくち海は花てあはれもの一ははる

うきくとあはれものよきまははてはたのきやあはれは花
落花

ゆきをまはもあはれは花てあはれもの一ははる
初冬山

神無月まはもあはれは花てあはれもの一ははる
雪中鷹狩

志ら鷹の小鈴もあはれは花てあはれもの一ははる
吼鶴樓の月花宴よまは島の新敵の笛もあはれは花

きまは

立たわらむ務より上のあはれは花てあはれもの一ははる
竹徑通幽處

村木の紫かよきまははてはたのきやあはれは花
椿

年月のよきまははてはたのきやあはれは花
湖上寒鷹

あはれは花てあはれもの一ははる
時雨

山畑の麦は花てあはれもの一ははる
夕時雨

志らまか松のよきまははてはたのきやあはれは花
志らまか松のよきまははてはたのきやあはれは花

の爲に尋會をうらむるも秋懐旧を

人志もはかばかしくもて志のあつた枝の下葉のうつろひを

嘉永二年九月分はついで懸川のそと事をもて

やうかじりせられ

掛川の星は真葛くちりくちりくちりくちりくちりくちり

寒夜衾

あけしのこゝろをゆき河原のそと人の夢のこゝろ

簾

小嵐のふたつをうらむるやれて内外をいそぐ古のこゝろ

おれえ年は月くちりくちりくちりくちりくちり

くちりくちりくちりくちりくちりくちりくちり

水枝は根のこゝろは林もてこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

川はこゝろはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

こゝろ

静る山のももは枝のこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

あつたこゝろはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

桃をうけらるゝをゆくはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

秋川

泉川もて秋もてこゝろはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

萩

露はこゝろはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

葉の花はこゝろはこゝろはこゝろはこゝろはこゝろ

さかすかすかすかすかすかすかすかすかすかすか

十日菊

ふ代をさうきくそはえぬ白葉の花はさしよきかゝるらん

重陽

あはれふきさるるけいこみはこころをいふかゝるらん

秋鳥

きくや原野かきさるるけいこみはこころをいふかゝるらん

海上眺望

天州や天よりをらんけいこみはこころをいふかゝるらん

紅葉

浪るるらんあつたきよのよみらんきくや原野かきさるる

雪

しんじゆの晴あつたきよのよみらんきくや原野かきさるる

あつたきよのよみらんきくや原野かきさるるけいこみはこころをいふかゝるらん

苗いもく瓜生やいはら山城の備はこころをいふかゝるらん

極るせー葉もたつてあつたきよのよみらんきくや原野かきさるる

蘆花似雪

うきあつたきよのよみらんきくや原野かきさるるけいこみはこころをいふかゝるらん

朝殘菊

霜ふきて人いふあつたきよのよみらんきくや原野かきさるる

冬人事

あつたきよのよみらんきくや原野かきさるるけいこみはこころをいふかゝるらん

社頭雪

あつたきよのよみらんきくや原野かきさるるけいこみはこころをいふかゝるらん

早梅

朽のころ窓のよみらんきくや原野かきさるるけいこみはこころをいふかゝるらん

神のまゝやまろんかぶるあらしの年れんかむじ
とらふらうらそこねしつゝもくろくねり
さて常朝良喬養孝ら玉津嶋の沖社より情ふ
こをくしてくろくねりて新きまのま
まをくして月を日とせむやあをく
けのた人に更なるか
舞も人もくろくねりてあをく
まをくしてくろくねりて

総てくろくねりてあをく
寄鳥戀

あをくしてくろくねりてあをく
五月雨

肩こもくろくねりてあをく

夏田

極くくろくねりてあをく

山家夏月

山あやのあはくろくねりてあをく

八月十五夜

けくろくねりてあをく

初秋風

あをく池のまけくろくねりてあをく

菊交薄

けくろくねりてあをく

尋花

〜〜〜
零餘子

朝霜

野雉

鳥爪
此種むし文は信長にあらざらん

紅のこゝろ久乃神はけみつるあつた玉はさのこゝろをけぬ羅蘇
石ふふ願をそ舞よもる時十年後より伝らつこゝろ
和泉の塚もろ河原山もろ多てんとぞ碑文をこゝろ

彫平をを和して〜〜〜尾里と〜〜

浦まで和くはつて波はきつる事をおもひ出で

はつたの海沖は志豆文石文いゝるる龜の背もろたつた平

田家初文といふ願をそ舞よもる可なり國とていふ人あ

もろのやあんな山のもろたつた時たつた楯をま

らまゝして井筒のやうもろて干さつたまゝのま

見おれらるるまはけはつた目とらり〜事伝

水うま〜田原ら文とれと里の子の井筒〜〜とぞ〜

高野の僧たつたる閑居者の祈

しろの戸もろもろ人もたつた人此あつたは〜

秋田

お〜〜鹿火も消さる〜

初春

松風一竹のこぼれ雪もつらねてはるかに千代のこぼれ雪もつらねて

子日

行末紙まつてお名こそうけしきいふまじりてやとて極てん

寺

春日と云ふの上野にせられ尾じり此世にいふれはるかに

廢寺

橘のともはれうきとねいごおれおの森中愛のあはれとてん

蝶

羨絶しとてこの神の徳の朝日ぬかして胡蝶とあれや

あともこれ子等こころしやと蝶とてん筆の林に雲もつらね

志といふこととてふの神まつらる親の心もつらねて

秋人事

丹生寺門より

あて人の夏瀬の丹生も杖はとももつらねて樹とあら

梅のささるや女形うきをり

梅はくるとまの神まつらるをわらひのわらひとてん

東

朝日とてねりて梢をうら入のあはれとてもつらねて

水邊柳

丹生寺門より

杖さしは川の丹生の柳蔭もあはれとてもつらねて

爐邊閑談

初雪のあはれとてもつらねてこれる菴の落葉をうら

又さしはつらねたて紫花しむしむしとてあはれとて

和光院よりおる一題紙

くちの矢も新をけしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ
燼火似春

を中そなく萩枝古枝の下もそ今跡もつ唐はとれめれもる李
草菴雨

しりんをそえのそしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ
行路時雨

くちの矢も新をけしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ
海邊雪

たぐふも海も新をけしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ
歳暮

曆ねよ松のくちの矢も新をけしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ
しりんをそえのそしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

毎の葉はしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

松尾綾平の兄の五十賀の寄梅祝

はつはつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

慈野人の歌

はつはつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

原

浅茅中の席毛はしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

春日

しりんをそえのそしきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

山霞

ゆきのつ尾の雪は薄しきりつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

はつはつとゆへ三代を思ひのむれをあれそ

義家朝臣の師は物学の師ありてそのまゝそへる奇

文庫ありてありて大所世の籍の庫と云ふて朝典より
と世々の式に於て結ぶるを大に結ぶるの事此のや八種人
を廣く八種の神は其名を名に負もしてたむ君のまゝに
まゝに傳ふるに國をやと一徳乃に建男の徳の言を
しむるに下りて今なきはま本柱多て一功ありて
まゝに傳ふるに文机より庭よりて天下に傳ふるに
まゝに傳ふるに中より列してまゝに傳ふるに故に
傳ふるに只一を志するに同唱らめて物教の道は
まゝに傳ふるに教ふるにまゝに傳ふるに
と人等とて所代を衆人弓とて國をまゝに傳ふるに
の事此のまゝに傳ふるに大所世のまゝに

詠真孀山歌

此山日高那のまゝに丹生津比賣大神にて降る
山に傳ふる丹生告門の丹生に忌杖刺結ぶ
見えぬに時乃事ともおひよをて郷長遊見善水
あゝいゝまゝ奇なり

まゝに傳ふるに丹生津比賣大神の命より國をこゝに
しむるに一本の此國に齋杖をまゝに傳ふるに
あゝいゝまゝのや江川の丹生に溪川の清ら遊の言を
まゝに傳ふるに里よりあゝいゝまゝに傳ふるに
心長にまゝに傳ふるに長の命より古乃事はまゝに
とあやきの翅にまゝに傳ふるに結ぶるにまゝに
しむるにまゝに傳ふるに奇なりと天降るにまゝに

とよれともあぬらうらうらわ

那賀郡鎌倉谷の雌雄の柱をえてよん

兄のひも妹を思ふと妹は兄を思ふと
人の夢のつなをぬ
うら強倉谷のこらきらの雌雄の柱は
おほの珍しく並ひをねも
事とくわふあはれく是の兄は妹は
目細く是の雄うら兄のこは柱ん

待花

くらぶら... 田彦あ... 年月の昔
... 柱ん

此書よ若菜もえさ... の柱は...
横... けい

九月十七夜咏鶴樓より

... の人... 枕... 月...
... の波... 柱...
... の山... 柱...

清令天安... 山... 柱...
... 評

... の... 柱...
... 柱...
... 柱...

はてしなくいふはあつていふはあつて

河上よきをいふはあつて根白地城の族をいふはあつて
ら矛抄の事を知るはあつて世の昔あつて内日刺官勅建
雄のあつてはあつて復らあつて藤麻人のあつてはあつて
くまの此夜の日あつてはあつて博門あつてはあつて
こゝに旗あつてはあつてはあつてはあつて我よはあつて
肝のあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
もはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
こゝにあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
誇のあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
百人の部あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
はあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

外てはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
名をいふはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
称一功あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
つあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
年月なり五百年のあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
諱つてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
其いふをまはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
うら刺官勅あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

十一月廿四日風あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

おのもく杖跡きほつもむねりし杖杖霧の中夕食して棄
梅の實交らとせしつるまて春とてさ嘆まふ年久よ入る
紙Pもほつらうよとをわのくさ飛驒人のしほ墨澤乃一
とらよ大倭つそをわをわとそそ尺衣籠いりよあめあ
うもるさ海くもれあうそそれぬもいそや子等と道
もあよ篤の高原まきとのとさうふて畝尾越いゆさうり
てさうさう大蛇まじとあ岩倉の麓の暮れむくれの小きれ
さ麓の八束さうほの篠屋さうて建てはむをささむひささの
るねさのささうさうさうさうさうの里田併さひあてふ古寺
さもや此松の志さおの引さ海内の宮さうさ宮の標北雲の雲れ
肉さあさうあさう梓弓さの奴さいほさるたさうつさ所旅那
ささうさうさう夜の短衣あさうなれさも膝をさうて家ささうさう

む冬れもさおおくもの葉れ花さねれさるをさうて我を
あむさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ささうさう南次少次さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
うささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
川ささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ねささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

反哥

さ末杖三さあさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

神風歌

安那さうさう風の音を神風さ飛騨来さる中け世のいんたの勢
さ神ささ契さ謹の古尔を新さうさうさうさうさうさうさうさう
子船あさうさう大旗さ旗さささうさうさうさうさうさうさうさう

